# 学究の場と現場との構造的ギャップ

ある障害児の親の集まりに参加。後の懇親の席上、次のような出来事を、そっと僕の耳元で話す母親達……（これらに類する話は、今までもいくつも耳にしているが……）。

①短期入所を利用して迎えに行ったら、腕にいくつかの青あざ。職員に聞くと「あらっ、何時、どうして出来たのかしら……」だけ。どうして一言最初に、せめて「気づかなかったこと、ごめんね」の言葉がないのかと、母親の嘆き……。職員の上司にも話したが、管理者の耳にまでは上がっていないようで、今後への対応が検討された様子もなさそうなので、心配で二度と利用しないという。

②施設の入所者が、ある生命現象で寝具を汚して本人は驚いてﾊﾟﾆｯｸ。職員がﾊﾟﾆｯｸの入所者に後始末を指示したが、出来ないのかと往復ビンタ。そうしたことがあったことを面会の母親にも黙っていたが、周りからの情報で問うとようやく答えたとか。親が管理者に話したことで管理者も初めて知ったようで、もちろん当の職員、管理者からの謝罪はあったが、今後への対応が検討された様子は、その後もなさそうとのこと。

いぜれの親も、なぜ最初に「ごめんね」の一言がないのかを嘆いている。最初にその一言があれば、親とてそう後々煩いことは云わないという。つまり、親の心情を察した最初の言葉かけを職員に望んでいるのであろう。また、同様なことが施設で起こらないように管理者を含め検討されることを、施設側に望んでいるのである。

いずれの親も、我が子のためのみならず他の子ども達のためにも、今後の施設としての対応策を管理者に文書で回答を求めてもいいぐらいの話。もちろんそう行動するには、親自身がかなりの勇気のいることであろう（この親達は、上司に、また管理者に申し入れる勇気ある親であったが、恐らく多くの親は、悶々としながらも沈黙しているのが現実ではないだろうか）。それだけに親は、いつか適切な場で適切な言い方で現状の問題を発信してくれるだろうとの願いから、僕に耳元で話したのであろうことは、それなりに理解しながら聞いた。

同じ頃に、全国の障害児・者の教育面のプロと云われる大学等の先生方の学会（僕も学会員）が仙台で開かれていた。

この事例のようなことが日常的に起こっているであろう施設の現場と学究発表の学会の場と、当事者側から見た社会的プロの、この構造的ギャップは、どう考えればいいのであろうか……。つい、考え込んでしまう。

（2003 年 09 月 23 日 記）